

52.

615.373.11

自己血液筋肉内注射ノ喘息, 蕁麻疹及ヒ 腦溢血等ニ對スル治驗例 (第1回報告)

ドクトル・メヂチーネ

近藤寛次郎

共述

醫學士

近藤弘

[昭和15年12月4日受稿]

緒言

自己血液或ハ血清ヲ其ノ人ノ皮下又ハ筋肉内ニ注射スル療法ハ古カラ行ハレタルモノデ別ニ珍ラシキモノデハアリマセズ、又瀉血法ハ最モ古ク行ハレタルモノノ様デス、東京丸ノ内ニハ自己血清注射療法ヲ専門ニヤリ相當ノ成績ヲ擧ゲテ居ルコトヲ聞キ、十數年前愚妻ノ叔母ガ頑固ナル喘息ニ惱ミ該治療デ治シタルコトヲ聞キマシタガ、其ノ方法等ハ公開セラレズ家傳ノ祕法ニナツテ居ル様デス。私ハ數年前他ノ病氣デ入院セル海員(23歳位)男デ、序ニ持病デアル頑固ナル蕁麻疹ヲ治療シテ吳レトノ望ミニヨリ自己血清ヲ恐ル恐ル2cc, 4cc, 5ccト漸次増量シテ4, 5日毎ニ注射シタルニ幾分カ輕快ヲ認メタルモ餘リ著シキ效果ハ認メザリシコトヲ想起シマス。自己血液筋肉内注射ハ腦出血ニ對シテ其ノ回復ヲ著シク早メルト云フ記事ガ昨年ノ日本醫事新報ニ載ツテ居タノデ、間モナク70歳以上ノ老女デ、慢性腎炎老耄症ヲ有スル瀉血ニ到底見込ハナイ様ダガ家族等ト談合ノ上自己血20ccヲ臀筋ニ注射シタルニ、全身ノ著シキ浮腫ガ2日後ニ非常ニ減ジタルヲ見テ驚キマシタ。其ノ患者ハ數日後ニ第2回ノ發作アリ尙ホ1回自己血注射ヲ試ミマシタガ徒勞デシタ。其ノ他3, 4例試ミマシタガ、2, 3回良好ラシキ經驗ヲ得

マシタ。但シ第2回ノ重キ發作ニテ3箇月後ノ發作ニハ自己血注射ハ如何トモシ難イモノモアリマシタ。腦出血ノ場合ハ大概高血壓ガアリマスカラ瀉血スル際先ヅ其ノ一部20cc位ヲ筋肉注射ヲナシ尙ホ處用適當量ヲ瀉血シ、凝固セザル様ニ豫メ稍々過量ノ枸橼酸青達液ヲ注射筒ニ入レテ取りタル血液ヲ豫メ用意持參セル滅菌「コルペン」中ニ貯藏スル時ハ其ノ血液ヲ以テ將來該患者ニリッゲル又ハ輸血ノ際安心シテ應用シ得ルモノト思フ。コレハ此度思ヒ付キタル事ニテ、私モ從來ハ瀉血シテ直チニ其ノ血液ヲ捨テ居レリ。腦出血ハ先ヅ瀉血、安靜、便通、食事ノ注意位ノ外、醫師ハ只ダ傍觀ノ外ナキモノナレバ自己血液注射ヲナシテ其ノ病原ヲ極メ、對照療法ヲ講ジツツ經過ヲ觀察スルハ最重症ハ勿論致方ナキモ、然ラザル限り興味深キモノナリ。其ノ症例ハ長クナル故略ス。

蕁麻疹

只ダ1例丈ケ成ルベク簡單ニ記載スルコトニスル。

本年3月29日初診 白○幸○ 男子 35歳、
興信所長

血歴及ビ既往症 父59歳腦出血死、母56歳健在、兄弟6人内3人死、2人ハ1歳位麻疹、1人

妹ハ18歳肋膜炎死、殘3人皆肺病質ナリト。
患者ハ21歳頃迄運動選手ナリシモ徴兵豫備検査
ノ爲メ大阪ニテ診察ヲ受ケシ「肺炎カタル」2箇
月静養ヲ要スト云ハレ偶々妹ガ前肥ノ病氣ニテ重
癒ナリシ爲メ驚キ遂ニ1箇年休學約2箇年毎日1
回「カルチウム」注射ヲ繼ケタルニ其ノ注射ヲ中
止シテ蕁麻疹ヲ起ス様ニナル、蟹、鯖ヲ食スレバ
必ズ起ル、一度新潟ニ「スキー」ニ行キ「カニ」ヲ食
シテ蕁麻疹ニ悩ミ醫師ナキ故宿ノ女中ノ勸メヨ
リ鍋炭ヲ米飯ヲネリテ食シ治ス。其ノ後毎年春秋
氣候ノ變リ目ニ必ズ起リ又外氣ノ寒キ空氣ニ觸
ルト其ノ部腫脹痒ヲ起シ緩メルト治ル嚴冬ニナ
レバ然ラズ晩酌3—5合、對酌1升以上、5,6日
宴會ガ續クト起リ相ナ豫感ガアル。3月29日全身
痒疹顔面軀幹手指足ニモ蕁麻疹強ク現ハル。2%
「クロールカルチウム」20cc「ツシアスト」ヲ注

射ス。30日 高度ノ發疹輕快セズ、硫苦100、鹽
里母100分、重曹30、「エフェドリン」0.02、乳酸
石灰1.0、「ケン末」0.3、「アルシリン」0.7、「リバ
ーゼ」1.0分3處置同前、注射後一時痒疹輕快スル
モ前頸、眼瞼、口唇、其ノ他全身腫脹著シ。31日
往診「カルチウム」、「ツシアスト」同様「ビトン」
錠15箇分3昨夜ハ痒疹ノ爲不眠ナリシト。本人ニ
勸メ「カルチウム」注射セシ時10ccノ血液ヲ取
リ腎筋肉注射ス。4日 來院、著シク輕快ス。2%
「カルチウム」20cc注射ス。5日 來院、「カル
チウム」ヲ注射シ、同時ニ15cc血ノ液ヲ取り、
直チニ腎筋肉注射ス。6日 良好ニテ來院セズ。
7日 前同様17.5ccヲ腎筋肉注射ス。其ノ後經過
不明ナリシガ今回患者訪ネシニ其ノ後1回モ發作
ナシト(9箇月間發作ナシ)。

蕁 麻 疹

姓名	性 別	年 齡	職業	病名	注射量及ビ月日			併 用 藥	摘 要	結 果	「アレ ルゲ ン」
					I	II	III				
白○	男	35	興信所	蕁麻疹	10 2/II	15 5/II	17.5 7/II	2%「クロールカルチ ウム」 「ツシアスト」	23歳ヨリ毎年春秋重キ蕁 麻疹ヲヤル、注射後9箇 月發作ナシ。酒ヲ嗜ム	良	「カニ」 「サバ」
山○	女	26	ナシ	肺結核 蕁麻疹	10 9/II			「ユクロシン」 「ヌベルカクノール」		良	ナシ
松○	女	24	ナシ	濕疹	10 10/II			「カルチウム」		不明	ナシ
酒○	男	41	會社員	蕁麻疹	10 17/II			「カルチウム」 「ユクロシン」		不明	ナシ
栗○	女	18	〃	〃	10 13/II	15 18/V	15 24/V	「カルチウム」		良	ナシ
玉○	女	31	會社員 家族	〃	15 1/VII	20 7/VII		「カルチウム」		良	ナシ
荒○	女	30	〃	〃	15 16/VII	20 22/		「ユクロシン」	第2回注射後惡寒 38°C 發 熱翌日解熱	良	ナシ

氣管支喘息

私ノ最モ力ヲ入レテ述ベントスルモノハコレデ
アル。別表ノ如ク10例中1例ハ不明デアルガ、其
ノ他皆驚クベキ卓效ヲ舉ゲテ居ル。喘息ハ御承知
ノ如ク難治ノ病デ長キハ10年、數10年苦シミ續

ケ大抵ノ患者皆自分ニ「アドレナリン」、「アストモ
リヂン」、喘息煙草、「エフェドリン」錠等ヲ用意シ
テ所謂喘息恐怖症トナレルモノモ多イ第3例ノ如
キハ7年間毎日「エフェドリン」ヲ2—6錠ヲ常用
セリト言フニテモ明カデス。只ダ茲ニハ2例ニ就

キ稍々詳細ニ記載シマス。

Ta 夫人(ポーランド人), 42歳, 図書館勤務。
喘息増息性, 肺結核, 肋膜炎癒着症, 肺氣腫。

血歴 父68歳, 母67歳健全, 母ニ喘息ノ輕キモノアリ, 兄弟7人内2人死亡5人健全。13年6箇月初潮, 21歳ロシヤニ捕虜トナリ喘息ガ初ル。出産後チーフーヨリ長崎ニ行キ8箇月ヲ經テモンゴリヤニ行ク1922年ロシヤヨリトルキスタンニ行ク25歳結婚1926年右濕性肋膜炎ニカカリ北京ニテ7箇月治療ス3,4回穿刺セリ, 肋膜炎ヲ癒シ迄ハ健康ナリキ以來餘リヨロシカラズ。此夫人ハ私ノ裏ノ借家ニ住ンデ居テ, 大連ニ來テ以來13年ニナル, 春秋ニ喘息發作アリ茲數年來夏3箇月ハヨク, 春, 秋, 冬ニハ實ニ重キ發作アリ, 發作時ニハ2月以上椅子ニ腰ヲ掛ケタママ殆ド流動食モ取レヌ位デ, 其ノ都度「アストモリヂン」, 「バントボン」ヲヤル, 「アドレナリン」ハ自分デヤル, 重キ時ハ發熱左右胸痛, 左右胸前側後下部小水泡音現ハル, 發作ノアル時ニハ藥ヲモラヒニ來ルカラ直グワカル, 自分ニ色キヤツテモイカヌ時ニ往診ヲ頼ンデクルノデアル。昨年モ萬策盡キテ大橋液ノ注射ニテ輕快シ患者ノ希望デ2,3回大橋液注射ヲヤツタ。10月23日計ル, 身長161.5cm, 體重10kg(着衣ノママ)頸圍31.5, 胸圍84, 横徑24.5, 前後徑21.5, 差6.4, 血壓140ノモノ10月23日120—70, 顔色蒼白, 肺ノ膨脹著明, 心濁音界著シク縮小, 高度ノ肺氣腫, 右肋膜炎癒着, 右胸後下部抵抗強ク輕濁時トシテ前下, 側方ニ「マサツ」音アリ又發作ノ時ハ左右共「ラ」音増加ス。此注射ハ弘ガ主ニヤリタリ。8月8日發作アリシト見ユ「バントボン」1箇モラヒニ來ル 第1回8月11日20cc自己血18日第2回20cc自己血25日第3回20cc自己血9月30日發作アリシト見ユ「ナルコボン」1箇モラヒニ來リ與フ, 10月3日第4回20cc自己血11日第5回20cc自己血19日第6回20cc自己血, 稀ニ輕キ發作アルモ直チニ治マル。自分ニモ非常ニ氣持ヨク顔色良好トナリ食思ハ増進,

深吸時ノ胸痛去ル。本月13日血色惡ク腰, 下腹痛アリトテ來ル超短波ヲ下腹部ニカケ婦人科醫ノ診察ヲ受ケル様ニ話シ歸宅セシメシニ數日後膜様粘液ノ數寸續キテ出タルモノ寄生蟲(條蟲)ノ排泄ナラムト驚キ持參セリ, 此患者ハ氣管支ノ形ヲナセル白色ノ喀痰ヲ喀出スルコトヲ述ベタリ, 持參セヨト云フモ一度モ持來ラズ。

第7例 森〇 4歳(父4, 母5號表中)

父42歳喘息, 母38歳喘息, 姉1人喘息(百日咳ヲヤリ以來發作止ム) 生後40日ニテ重キ發作アリ海老ハ與ヘズ昨年7月迄ハ池田先生ニ治療ヲ受ケズツト發作繼ギ全ク骨ト皮トナリ 昨年10月ヨリ本年1月迄百日咳ヲヤツテカラ8月迄發作ナカリキ, 7月以來全身「アカシヤ」蟲ニ刺サレタル爲メカ全身ニ瘡痒性發疹ヲ生シ膿破化膿シ痂皮ニテ蔽ハル。8月30日來院ノ際ハ顔面全身浮腫著明ノ蛋白尿ニテ急性腎炎ナリ。コレハ酷制「ビゾール」, 「ヂウレチン」投與, 3%白降汞ニテ皮膚ノ發疹モ大概輕快ス, 2週間ニテ蛋白消失ス。第1回10月4日喘息發作アリ往診自己血5cc, 第2回10月11日同様, 第3回10月18日5cc自己血, 10月3日外出シテ喘息發作アリ4日朝ヨリ死ンダモノノ如ク朝ヨリ何も食セズ體溫37.7, 顔面幾分「チアノーゼ」全ク元氣ナク一般ニ「ギーメン」小笛聲側方ニ小「ラ」音アリ母ノ話ニヨレバ自己血注射後間モナク起キテタ食ヲ採リ翌日ハ母ガヤカマシク言フテモ聞キ入レズ外ニ出テ飛ビ歩キタリト, 第2回11日來院注射ノ時ハ笛聲「ギーメン」ナク呼吸音ハ清朗デ健康兒ノ如ク18日ハ發作アリ過食ノ爲メカ發熱38.2, 脈142, 呼吸數60嘔吐アリ顔色ハ良トナル。直チニ5cc自己血注射後數分ニテ呼吸數著シク減ジ苦惱ハ目ニ見ユテ佳良トナル。21日患者ノ宅ニ行キ身長91, 胸圍30, 腹圍47, 横徑16, 前後徑11, 頸圍23.5, 體重12kgヲ計ル。顔色良好元氣ヨク遊び歩キ氣像ヨク朗カデ母親ハ食慾ノ非常ニ盛デ驚ク程ナリト言ヘリ。

喘 息

姓名	性別	年 齡	職 業	病 名	遺傳	注 射 日					摘 要	結 果	ブロキロ 血液量	「アレレ ゲン」
						I	II	III	IV	V				
Ta	女	42	會社員	喘息性結核	(+)	11/Ⅲ	18/Ⅲ	25/Ⅲ	3/X	19/X	21年間春秋重キ發作注射後30/Ⅲ日1回輕キ發作アリ自己血液注射後漸次血色良食思増進11月初旬肺病痛癆液排出ス	良	0.4000 20 cc	「イチゴゴ 煙草、枯草、 コービー」
朴	女	20	酌婦	喘 息		1/Ⅲ					不 明			「ビール」 「赤 酒」 「チンブラ」
千	女	32	會社員 家族	"	(+)	11/Ⅲ	23/Ⅲ	30/Ⅲ	13/X	20/X	20年前ヨリ10年前妊娠中重キ發作、注射後1回輕キ發作アリ食思良血色好トナル11月15、16、17日防癆演習ニ幕ヲ持テ走り廻リ何トモナカカリキ	良	0.3725 20 cc	油 霧 ゴミ掃除
越	男	50	士 木	"	(+)	14/Ⅲ	21/Ⅲ	28/Ⅲ	9/X	19/X	10數年來冬ニ重キ發作アリ、注射後何デモ食シ輕キ發作アルモ大シクダコトナク以前ニ較ベテ非常ニヨクナル血色ヨク體ガシマタル感アリ	良	0.3140 0.4687 20—30 cc	青 魚 肉 類
森	男	50	新聞社	"	(-)	30/Ⅲ	6/X	13/X			7年來重キ發作2回注射後1回稍々重キ發作1回アリ血色良トナル、以來ナシ	良	0.3846 20 cc	シ
森	女	38	" 族	"	(-)	23/Ⅲ	29	5/X	11/X		14年重キ發作アリ、血色良食思増進、10月ヨリ本年1月迄	良	0.5000 20 cc	「エ チアスワ クチン」
"	女	4	"	急性 腎 炎	(+)	4/X	11	18			生後40日ヨリ發病重昨今日咳ヲヤリリテ以來發作遠ザカリタルモ「アカシヤ」蟲ニ刺サレ全身腫痒性發疹、急性腎炎腹發1月以來發作アリ注射後食思増進血色良肥滿但シ輕キ發作アリ	良	0.3333 5 cc	「エ ビ」
D.D.	男	25	會社員	既往症肋膜炎	(+)	25/Ⅲ	18/Ⅲ	13/X	23		4歳ヨリ發疹重症、注射後1回發作アルモ輕シ、血色良	良	0.3365 20 cc	シ
N.B.	男	25	"	喘 息 「ロイマチス」	(+)	6/X	13				4歳ノトキ、3、4年來風ヲ引クト發作アリ	良	0.2136 20 cc	シ
S.	男	32	"	喘 息	(-)	9/X	13	18			3年前上海ニテ1回重キ發作本年第2回目重症3回注射後7日ヲ經テ重キ發作1回アリ以來ナシ	良	0.3641 0.3947 20—30 cc	シ

以上へ去る 10 月 25 日第 300 回大連醫學會ニ於テ述ベマシタ概略デアリマシテ、各例ニ就テ述ベルト非常ニ長クナリマスカテ略シマシタガ、其ノ後結核性ノ疾患慢性腎炎或ハ急性「ロイマチス」ニ試ミ良好ナル效果ヲ認メマシタガ、コレハ第 2 回報告ニ廻シマス。結核性疾患ニハ初回 1 cc 位ヨリ毎 7—10 回目 0.5—1.0 cc ヲ増量シテ慎重ナル態度ヲ以テ進ミツツ急性「ロイマチス」ハ私從來ノ經驗ニテ少クモ 1—2 箇月以上ヲ要スルモノト思ハル重症ニ 1 回 20 cc ノ自己血液ニテ僅ニ 7 日間ニ全治シタノニハ其ノ效果ニ驚キマシタ。念ノ爲メ第 2 回ヲヤリ患者ノ心カラナル感謝ヲ受ケマシタ。私ハ腦出血ニ對シテハ昨年來蕁麻疹ニハ本年 1 月來喘息ニハ 8 月以來ノ試ミデ其ノ例數モ少ク其ノ後ノ經過日數モ幾バクモナイ故其ノ成績ヲ云々スルハ尙ホ早イト考ヘマスガ、元來刺戟ハ古ヨリ日本デモ吸角醫師民間ニモ廣ク應用セラレ自分ノ幼少時ニハ其ノ實施ヲ度々目撃セル處デアリマス。腦出血ノ場合ハ糖尿病、慢性腎炎、「アルコール」常用等ニヨリ動脈ノ變性且硬化ガアリ血壓高クナリ出血部位ガ頭蓋骨内ナル故止血ノ方法ナク止血藥ノ注射、絶對安靜、瀉血ヲシテ經過ヲ見ヨリ仕方ナク、前記ノ通り瀉血ノ一部ヲ腎筋内ニ 20 cc 位注射シ殘餘ハ消毒「コルベン」ニ凝固セヌ様ニシテ貯藏シ置キ將來該患者ノ危篤ノ際リンゲル液ニ混ジ又輸血ノ目的ニ應用スベキコトヲ強調シマス。

抑血液ハ人間ノ發生、成長、生存ノ續ク限リ凡ユル必要ナル物質ヲ過不足ナク各臟器、各組織ニ供給シ、酸化還元ノ兩作用ヲ必要ニ應ジテ營ミ、其ノ他種々ノ酵素、「ホルモン」養素ヲ供給シ各臟器組織ノ機能ヲ適當ニ發揮セシメ其ノ生ゼシ廢殘物質ヲ運搬排泄セシメ病態狀態ニ於テハ各其ノ機能ヲ動員シテ抗病ノ生存保持ノ反應ヲ遺憾ナク發揮セシメツツ全生體ヲ保持シ健康ニ向ハシメント試ムル實ニ不思議ニシテ神祕ノ作用ヲ持ツモノデアル。今日其ノ成分明カナルモノモアリ又不明ノモノモ數多イコトト思ハレル。次ニ自己血液筋肉

内注射作用ヲ考察スルニ就キ、第 1 ニ起ル現象ハ 20 cc ノ血液ヲ取レバ血壓ノ低下ハ人ニヨリ、場合ニヨリ、年齡ニヨリ體重(全血量)色々相違スルモ間違ナク起ル、大人デ 10 以上降ル。コレハ自分ノ想像デアリマスガ、或ル外國ノ報告ニ「インシュリン」10 單位ヲ靜脈内ニ注射スルト血糖ノ急低下ト血壓ノ急降下ヲ起シ白血球ノ 2 倍、「アドレナリン」ノ 5, 6 倍増加ヲ起ス、コレハ何ニヨツテ來ルカ「アドレナリン」ハ副腎皮質ヨリ分泌セララルモノデ健康人ニハ絶エズ適當ニ分泌セラレテ居ルモノト思ハルガ、喘息ノ際ニハ脈ガ小トナリ緊張ノ弱クナルノハ迷走神經ガ緊張シテ血管ガ弛緩スル爲メカモ知レヌガ「アドレナリン」ノ分泌ガ減少シテ居ルノデハナйкаト思ハレル。「アドレナリン」ハ交感神經ヲ刺戟シ血管ヲ收縮セシメ血壓ヲ高メル、サレド交感神經ノ支配下ニ立タザル心冠狀動脈ハ擴張スル喘息ノ初期ノモノノ「アドレナリン」少量ノ注射卓效アルノハ以上ノ理由ニヨルモノデハナйкаト思ハル。少量ノ瀉血ト且筋肉内注射ガ私ノ考フル如ク「アドレナリン」ノ増加即チ副腎皮質ノ機能増進ヲ起スヤ否ヤハ將來ノ研究ニヨリ確メル外ナイ。

第 2 ニ注射セラレタル血液ノ運命：自己血液ナル故例外ナク何等認ムベキ副作用ハアリマセヌ人ニヨリ注射局部ノコワバ感又ハ輕キ疼ミヲ訴ヘルモノモアルガ多クハ無痛デス、多少反應ノ發熱ヲ認メル場合(蕁麻疹 VII)アリテモ其ノ效果ハ却テ良好ナル様ナリ例外ナク硬結等ヲ殘スコトナク數日内ニ見事ニ吸收セララル恐ラク血液ハ枸橼酸曹達液ヲ加ヘザルモ筋肉内ニ凝固セズシテ漸ク保タレ血腫狀トナリテ己ニソレハ注射後直チニ吸收セラレ得ルモノハ吸收セラレ逆ニ赤、白血小板等ハ早晚崩壊シ諸種ノ必要ナル成分ハ都合ヨキ形ニ於テ遺憾ナク吸收運搬セラレ必要ナル組織又ハ臟器ハ機能ヲ適當ニ刺戟シテ増強或ハ抑制的ニ作用ヲ逞フスルモノデアラウト考ヘル。コレハ將來大ナル研究題目タルト同時ニ各組織臟器ノ今日迄

既知ノ作用ニ如何ナル影響ヲ與フルモノナルカ、其ノ總テノ作用機轉ハ甚ダ興味アルモノデ將來ノ研究ニヨリ分明セラルルナラン。

血液量： 自ノ注射シタ血液量ハ別表ノ通り最高Pro kilo 0.5000—0.2631デ最近結核性疾患ニハ其ノ1/10—1/20デアリマス（1cc—2cc）茲デハ本年8月25日發行「カード」式診療實函第34號735頁ノ記事ヲ參考迄ニ概記スルノガ便利デアリマシヤウ、私が第300回講演ノ原稿ヲ記載スル際、10月20日頃何時モ多忙ノ爲メニ配本ヲ書棚ニ押込シテ減多ニ目ヲ通サナカツタ不圖此號ヲ見テ居ル内ニ偶然ニ次ノ標題ヲ、獨乙デハ22年前ヨリ實施シテ居タノデ驚キマシタ。

Eigenblutinjektion（血家注射）適應及非適應
Robert Thisbad: Erfahrungen mit Eigenblut und Fremdblutbehandlung. (Dtsch. med. Wsch., S. 179—1940.)

著者ハ1918年戰線デ「デフテリー血清」ノ手ニ入ラナカツタ際「デフテリー患兒」ニ初メテ自家血液注射ヲ行ヒ著效ヲ認メタ事ニ刺激サレテ其ノ後ハ凡ル疾患ニ自家血液注射乃至ハ其ノ變法ヲ行ヒ多數ノ急性及ビ慢性疾患例之衰微狀態、敗血症、「アレルギー」疾患、「ロイマチス性」素質種々ナル内分泌性障礙ニ際シ自家血液注射ヲ單獨ニ或ハ非經口ノ乃至皮下蛋白體及ビ「ホルモン」注射ノ併用ニヨリテ良好ナル成績ヲ得ルニ至ツタ。特ニ喘息、枯草喘息ニハ自家血液トAsthmeut及ビAllercaノ併用ニヨリテ驚歎ニ價スル持續治癒效果が見ラレタ。即チ喘息患者110例中107枯草性喘息33例中33例ガ全治ス。注射ノ反應ハ症例ニヨリテ千差萬別デアル外ニ注射血液量ノ多寡ニモ關係スル注射様式ハ第1回1—2cc（0.2—1cc）自家血液ヲ靜脈ヨリ取りコレヲ皮下或ハ筋肉内ニ注射スル、注射後患者ガ急ニ上機嫌ニナルガ特有デアル。コレガ8—24時間後ニハ1時的ニ體温ガ上ル其ノ後ハ直ニ病氣ハ好クナル更ニ注射後第4日、第6日、第9日ニモ注射ニヨル反應が見ラレル。第2回ノ

注射ハ急性疾患デ早クテ5日後、慢性疾患デハ10—14日、一般ニ急性疾患デハ1—2回、慢性疾患デハ10回迄行フ。著者ノ經驗ニヨレバ、自家血液ノ療法ノ非適應症トシテハ痼疾患ト末期肺結核ガ舉ゲラル。痼疾ハ如何ナル時期ニモ該注射ニヨリテ癌細胞ノ増息ノ促進ガ認メラルガ肺結核ノ第1期、第2期ニハ反テ多クノ場合著明ナル效果が見ラレル此際ニハ14日置キニ0.5—1ccノ自家血液ヲ體温及ビ體重ニ注意シツツ注射スル（以下略）

私ノハ喘息、蕁麻疹ニ對シテ初メヨリ私ノ獨創的ニ10—20ccヲ用ヒ大抵5—7日間隔デ3回位デ目的ヲ達スル様ニ思ヘル。1—2回著シキ效果ヲ患者ガ自覺スル發作ハ注射中ニモ來ルコトガアルガ以前ニ比シテ非常ニ輕イ。第10例S氏ハ第3回注射ハ30ccヤツタノデアルガ、コレハ獨乙人デ、體重78kgモアル故大量ヲ試ミタモノデ第3回後7日目は重キ發作1回アリ2,3日前本人ニ逢ヒタルニ其ノ後ハ非常ニ健康ナリト喜ビ居リタリ。少量デ效果ガアルナレバコレニ越シタ事ハナイノデスカラ私モ少量ヲ試ミル積リデアリマスゾコデ考ヘササレルノハ古ヨリ應用セラルル吸角支那人ノ習慣トシテ按摩ガ強ク捻ツテ額面、頸部、胸、背、四肢ニ著明ナル皮下溢血ヲ起サシメ額ハ支那ノ恐ロシキ面、胸ハ騎兵ノ胸飾ノ如ク各肋骨或ハ肋間ニ長大ナル溢血ヲ認メル、私共ハ其ノ見苦シキ醜體ト馬鹿ラシサヲ心中嘲笑シテ居タノデアアルガ此度ノ自己血液注射ノ治驗ト獨乙ノ報告デ大ニ考ヘサセラレタワケデ、眞理ハ案外ニ手近キ處ニ在ルモノダトハ宜ナル哉ト感歎セザルヲ得ヌ次第デアリマス。

結 論

自己血液注射療法ハ決シテ珍ラシキ治療法デアリマセヌガ不圖喘息10例、蕁麻疹7例ニ試ミ第1回注射後3日位ヨリ其ノ效果顯著ニ現ハレ、同ヲ重ネルニ從ヒ患者自覺愈々良好ナル故又他覺的ニメキメキ諸症輕快シ患者ハ朗カトナリ進デ

注射ヲ受ケニ來リ、第3回ニテ即チ早キハ10—20日ニテ殆ド所期ノ目的ニ達スル様ニ思ハルルガ何分例數モ少ク、日月ノ經過モ短カキ事故其ノ效果ノ永續性ハ今後ニ待ツヨリ外ナキ次第如何ニモ報告スルノハ尙早ノ感アルモ患者ノ苦惱ヲ考フル時、其ノ效果永續ガ假ヘ1—2月又ハ半年ニシテモ其ノ方法タルヤ甚ダ簡單明瞭デ何等患者血液量ニ損傷ナク危險副作用ヲ伴ハズ急速ナル快癒ガ得ラルナレバ現下非常時局下ニ於テ國家ガ新體制高度國防國家建設ニ全國人ノ全能率ヲ發揮ヲ國家ガ要望スル際殊ニ一般醫界ハ藥品材料ノ缺乏ニ苦シミツツアル際此方法ヲ早ク發表一般ニ普及セシメ度キ願望ト熱意トニ不備ヲ不願發表セシコトヲ諒セラレ、諸位ノ御實施ヲ希望シテ止マヌ次第デアリマス。

自家血液注射療法ヨリモ自己血液注射療法ノ方ガ字義ヨリモ穩當ナリト考ヘ近頃醫語ノ問題モア

リ自己血液トシマシタ。右報告後喘息患者4例、蕁麻疹3例、結核數例、神經痛、「ヒステリー」(內分泌障礙)、急性「ロイマチス」等アルモ第2回報告ニ讓ル。

追記

單純ノ氣管支喘息ナレバ自己血液10—20gノ注射ハ從來何等發熱等ノ副作用ナキモ最近喘息患者ニシテ「アスピリン」、「アンチピリン」特異體質ノ者ニシテ37.6°Cノ發熱アルモノ8gノ自己血液ヲ注射シ發熱繼續セルモノアリ殊ニ結核等ヲ合併セル場合モ考慮ニ入ルナラバ充分既往症ヲ注意シ特異體質或ハ結核ヲ合併スル疑アル場合ハ赤血球沈降速度ヲ檢シタル上若シ著シク赤沈亢進セル場合ハ1ccヲ以テ初メ毎7—10日間ニ反應ヲ觀察シツツ漸次0.5—1.0ccヲ増量スルヲ適當トス。

Erfahrungen mit Eigenblutbehandlung gegen Urticaria und Asthma Bronchiale.

Von

Kanziro Kondo und Hiroshi Kondo.

Eingegangen am 4. Dezember 1940.

Der Aderlass und die Saugbehandlung sind beides schon sehr alte Methoden; Behandlungen mit Eigenblut oder Eigenblutserum kommen in der Therapie nicht so selten vor, dagegen habe ich nicht so oft klinische Mitteilungen über Behandlungen von Hirnblutungen, Urticaria und Asthma mit Eigenblutinjektionen gelesen.

Neulich habe ich einige Fälle behandelt und zwar einige Hirnblutungen im letzten Jahr, Urticaria im März d. J. und Asthma Bronchiale im August d. J.

Bei Hirnblutungen, wenn es sich nicht um besonders schwere Fälle handelte, liessen alle Störungen schnell nach; von 9 Urticaria-Fällen war in 6 Fällen der Erfolg gut, während 3 Fälle unklar verliefen.

Es wurde folgende Methode angewandt. Mit einer Spritze, die bereits 24%ige CaCl_2 -Lösung oder Jukromin enthält, werden dem Kranken 10—20 cc Eigenblut aus der Ellbogenvene entnommen. Der Inhalt der Spritze wird dann sofort intramuskulär in den

Gross'schen Dreieck injiziert. Die Behandlung erfolgt einmal in Abständen von 2 bis 5 Tagen.

Bei Asthma war die Methode wie folgt: in Abständen von 5 bis 7 Tagen wurde den Kranken 5 - 30 cc Eigenblut injiziert und zwar 0.26 - 0.5 cc per Kg. Von 10 Asthmafällen waren 9 Fälle erfolgreich, obwohl in einem Falle starke Anfälle in den Intervallen vorkamen.

Das Resultat ist wunderbar. Blasse Gesichtsfarbe verschwindet, das Körpergewicht nimmt zu und die Stimmung des Kranken bessert sich. Bei einem an Fettsucht leiden den Patienten hat sich die Gesichtsfarbe viel gebeesert, das Körpergewicht abgenommen, die Stimmung sich sehr gebessert. In allen Fällen hat der Appetit stark zugenommen.

Nebenwirkung: nur in einigen Fällen klagten die Kranken über sehr leichte Schmerzen an der Injektionsstelle.

Wie Sie wissen, enthält das Blut alle Stoffe, die der Körper zur Erhaltung seiner Lebensfähigkeit braucht. Bei verschiedenen abnormalen Zuständen (acute und chronische Krankheiten) treibt das Blut in sich alle notwendigen, physikalischen, chemischen und bakteriologischen, wunderbaren Heil- und Abwehrmittel, die unschätzbar für das Menschenleben sind.

Warum können Eigenblutinjektionen mit gutem Erfolg gegen Asthma und Urticaria angewandt werden, ist bis jetzt noch nicht klar. Dies können nur weitere wissenschaftliche Untersuchungen aufklären. Vermutlich wird das Blutserum des intramuskulär oder subkutan injizierten Blutes sehr schnell resorbiert, während die roten und weissen Blutkörperchen und andere morphologischen Bestandteile allmählich zerfallen und sich auflösen um dann reborbiert zu werden.

Das Eigenblut enthält viele Allergien wie auch Antiallergien, Toxin, Antitoxin und andere noch nicht geklärte Substanzen. Durch diese verschiedenen Substanzen werden alle körperlichen Gewebe gereizt und zwar insbesondere die Haut, Organe der inneren Sekretion, Knochenmark, Milz, Leber, Pankreas u.m.a. Daher guter Appetit, gute Gesichtsfarbe, gute Stimmung und plötzliche Vermehrung des antiallergieschen Stoffes, endlich allergischer Festzustand.

Die Adrenalinmenge des Blutes vermehrt sich plötzlich durch den niedrigen Blutdruck, hervorgerufen durch die Blutentnahme.

Ich fürchte diese Mitteilung zu früh gemacht zu haben, da ich bislang nur wenig Erfahrung gesammelt und ist nach Behandlungen noch zu wenig Zeit vergangen. Wenn ich aber an den Kummer der Patienten denke, so kann ich nicht länger hinhalten und möchte ich auch Ihnen empfehlen die beschriebene Methode sofort praktisch zu versuchen, zumal diese Methode ganz einfach ist und keine Nebenwirkungen hervorruft.

(Autoreferat)